

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 22 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720204

研究課題名(和文) 自然言語におけるスケール性の意味・機能上の役割：形式意味論・語用論的アプローチ

研究課題名(英文) The role of scalarity in the meaning and function of language: a formal semantic/pragmatic approach

研究代表者

澤田 治 (Sawada, Osamu)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：40598083

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、自然言語におけるスケール性の意味・機能上の役割について、意味論と語用論のインターフェースの観点から考察した。具体的には、程度副詞、比較表現、モーダル指示詞、指小シフト等のスケール現象に焦点を当て、真理条件的なスケールの意味と非真理条件的なスケールの意味(慣習的推意)の関係について考察した。本研究により、(i)スケール性は、狭義の意味論レベルのみならず、ポライトネス、発話モード、会話の優先性、感情表出等が関わった意味伝達(語用論)の次元においても重要な役割を果たしており、(ii)意味論レベルのスケール構造と語用論レベルのスケール構造の間には平行性があるということが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This project investigated the role of scalarity in natural language in terms of the semantics/pragmatics interface. Particularly, I focused on the phenomena of intensifiers, comparison, modal demonstratives, and diminutives, and considered the relationship between semantic scalar meaning and pragmatic scalar meaning. Through analyzing the meanings and use of these phenomena, I clarified that (i) scalarity not only plays an important role in the semantic dimension but also in the discourse-pragmatic dimension (e.g., politeness, modes of speaking, precedence of utterances, and expressives), and that (ii) there is a parallelism between the semantic dimension and the pragmatic dimension in terms of scalarity.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：scalarity comparison degree intensifier diminutive logic modality conventional implicature

### 1. 研究開始当初の背景

申請者がこれまで取り組んできた研究テーマは、「スケール性」の意味論・語用論である。「スケール性」とは、複数の物事が同一のスケール上で順序づけられる現象であり、人間の最も根源的(primitive)な認知能力を反映するものである(Sapir 1944)。

我々はスケールを用いて、(1)のように、物の大きさや重さなどを客観的・物理的に測ったり、複数の実体を比べたりすることが可能であるが、(2)のように物事を「主観的」に、「評価」することも可能である。

(1) This rod is 2 meters long.

(2) Even Tom came to the party. (前提: Tom is the least likely person to come to the party.)

(1)と(2)におけるスケール性を比較した場合、(1)における測量表現 2 meters は竿の長さを物理的に測っているという点で客観的である。それに対し(2)におけるスケール副詞の even は Tom を「パーティーに来そうにない」尺度上で(最も)極端な場所に位置付けている。ここでのスケールは、話し手の主観に基づいたスケールであるという点で主観的である。上の違いを意味論と語用論のインターフェイスの観点から見ると、前者のスケールの意味は、文の命題の真理条件に関わる意味(truth conditional meaning)であるのに対し、後者は、命題の真理条件に関わらない意味、すなわち、慣習的推意(Grice 1975; Karttunen and Peters 1979)ということができる。これまでの意味論・語用論の理論では、2つのレベルの意味は完全に別々の「次元」に属しており、両者は意味の演算システムにおいて互いに関わらない独立した意味であると考えられてきた(Potts 2005, 2007; McCready 2010)。

しかしながら、スケール表現の中には、ある単語が意味論レベルと語用論レベルのどちらのレベルでも用いられるという現象(「2重使用現象」)がある。

(3) a. この竿は{**ちょっと/少し**}曲がっている。  
(真理条件的意味)

b. {**ちょっと/\*少し**}それはできません。  
(非真理条件的意味)

(4) a. 健康は**何よりも**大切だ。  
(真理条件的意味)

b. **何よりも**太郎はやさしい。  
(非真理条件的意味)

(3a)における「ちょっと」は、竿の曲り具合を客観的に測っているのに対し、(3b)の「ちょっと」は、話し手の断りという発話行為の程度性を弱めている。また、(4a)は「健康は他のどんなことよりも大切だ」ということが述べられており、その場合の「何よりも」は比較文の命題の構成要素となっている。それに対し、(4b)の「何よりも」は、「当該の命題(「太郎はやさしい」)が話し手にとって最も重要な命題である」ということが表されている。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、真理条件的(客観的)なスケールの意味をもったスケール表現と非真理条件的(主観的)なスケールの意味の間の関係性に注目し、自然言語におけるスケール性の意味・機能上の役割を意味論と語用論のインターフェイスの観点から明らかにすることである。具体的には、(i)真理条件的なスケールの意味と非真理条件的なスケールの意味の間の平行性・非平行性とは何か、(ii)主観レベルにおけるスケール構造はどれほど複雑(体系的)であるのか、(iii)なぜ2重使用現象が起こり得るのか、(iv)スケール表現における言語の普遍性・個別性とは何か、といった問題を考え、それらに対して理論的な説明を与えることを試みる。

### 3. 研究の方法

- ・本研究の課題を遂行するに当たっては、とりわけ、程度副詞の「少し」、「ちょっと」、強調の副詞「もっと」、比較表現の「何よりも」、指小シフト、モーダル指示詞の意味・機能に焦点を当てる。
- ・分析にあたっては、これまでのスケール現象に関する研究（比較構文、程度副詞、フォーカス、量化詞、推意等）を踏まえ、理論面と言語事実の両面から、スケール表現の意味・機能について考察する。
- ・コーパス等の様々な言語データを参照しつつ、新たな言語事実・関連現象を探る。また、通言語的な観点からスケール表現の意味・使用について考察する。
- ・統語論、意味論、語用論、言語哲学における様々な研究に接し、研究テーマとの接点を探る。

#### 4. 研究成果

各言語現象についての具体的な研究内容・成果は以下の通りである。

##### [1]程度副詞「もっと」の2重使用現象

これまで、日本語の副詞「もっと」には、2つの個体を比較する用法（程度用法）と現状に対する話し手の不満を表す用法（否定用法）があり、両者は意味的に異なった特性を有していると考えられている（渡辺 1985, 佐野 2004 など）。たとえば、以下の例は、程度読みと否定読みの2通りの解釈が可能である。

(5) もっと速く走れ！

（程度用法、否定用法）

本研究では、程度用法と否定用法の間の意味的關係性について考察した。具体的には、否定の「もっと」は想定状況と発話状況との間のギャップを計量する比較の形態素であり、両用法は「比較」の概念を用いて統一的に説明可能であることを論証した。

##### [2]「ちょっと」と「少し」の非対称性

少しとちょっとはどちらも形容詞を修飾することができる。

(6) この本は{少し/ちょっと}高い。

（意味論的用法）

しかしながら、「少し」は、「ちょっと」と異なり、発話行為のレベルにおいても使われる。

(7) 今日は{ちょっと/\*少し}時間がないです。

（感情表出的用法）

(7)の「ちょっと」は、(6)の「ちょっと」と異なり、発話行為を修飾し、聞き手に対する発話行為の押しつけ度（ここでは「断り」）を弱めている。本研究では、「ちょっと」と「少し」における非対称性は、正確性・不正確性に関する違いと密接に関わっているということを主張した。すなわち、「ちょっと」は不正確な計量を行う際に用いられ、そのことがスピーチアクトレベルでの計量を可能にさせているのに対し、「少し」は、正確性（証拠性）を伴った計量の際に用いられるため、不正確性を内在したスピーチアクトレベルでの計量では使えない。

##### [3]談話用法の「何よりも」の意味・機能

「何よりも」は、意味論レベルのみならず、談話・語用論レベルにおいても使われる。

例えば、以下の例に見られるように、「何よりも」は、しばしば、一連の発話において、最も重要な情報から「優先的」に並べる際に使われる。

(8) A: 東京はどんなところですか？

B: 何よりも、東京は便利がよいところ  
です。

しかしながら、以下の例に見られるように、談話・語用論的な「何よりも」は、一連の発話の最後に用いて、次にくる発話が最も重要であるということ、「累加的」に表すこともできる。

(9) A: 東京はどんなところですか？

B: 東京は便利がいいし、国際色も豊かです。そして何よりも、東京は安全です。

本研究では、談話・語用論レベルで用いられる「何よりも」は「当該の発話は会話のゴールに到達する上で最も好ましい(重要な)発話である」という話し手の心的態度を慣習的推意のレベルで表し、その会話全体の中での役割は、会話のどのタイミングで使われるのかによって異なり得るということを論証した。

本研究により、スケール性は、会話構造においても使われ得る柔軟な概念であり、会話をゴールに向けて効率的・効果的に進めていく上で重要な役割を演じているということが明らかになった。

#### [4] 指小詞シフトのスケール性

本研究では、日本語の[s]から[ch]への音韻変換と話し手の感情表出の関係について考察した。次の例に見られるように、

(10) これは僕の本でちゅ。

(cf. これは僕の本です。)

具体的には、[s]から[ch]への音韻変換の本質は、話し手の成熟度の度合いを慣習的推意のレベルで極端に下げることであり、それにより表される感情表出的意味(「甘え」や「連帯感情」)は、聞き手が誰であるかによって変わり得るものであるということを論証した。

#### [5] モーダル指示詞の意味・機能

共同研究者の澤田淳氏と、モーダル性を帯びた日本語指示詞の「あの」(例:「あの太郎が負けた」)の意味について考察した。

(11) あのフェデラーが負けた。

(モーダル用法)

具体的には、モーダル指示詞の「あの」は、他の指示詞用法と異なり、「ターゲットが関わる当該の事象(命題)は成立しそうにない」

という発話状況に対する話し手の認識的態度が関わっていることを明らかにした。

・研究全体を通して得られた成果

本プロジェクト全体から得られた成果としては、以下の2点が挙げられる。[1] スケール性は、狭義の意味論レベルのみならず、現状に対する話し手の態度、丁寧さ、発話モードの変換、発話内的力の調整等が関わった言語現象にも見られ、スケールは、談話・コミュニケーションレベルにおいても重要な役割を果たしている。[2] 意味論レベルのスケール構造と語用論(談話)のスケール構造の間には平行性がある。

今後は、コンテキスト可変性や情報のアップデート(dynamic semantics)の観点も踏まえ、談話レベルにおけるスケールの役割について考察していきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

1. Sawada, Osamu. To appear. An utterance situation-based comparison. *Linguistics and Philosophy*. 掲載確定。(査読あり)
2. Sawada, Osamu and Jun Sawada. To appear. The meaning of modal affective demonstratives in Japanese. In Seungho Nam, Heejeong Ko and Jongho Jun (eds.), *Japanese/Korean Linguistics 21*. Stanford, CA: CSLI Publications. 掲載確定。(要旨査読あり)
3. Sawada, Osamu. 2014. On the context-dependent pragmatic strategies of Japanese self-diminutive shift. In Urtzi Etxeberria, Anamaria Fălăuş, Aritz Irurtzun, and Bryan Leferman (eds.), *Proceedings of Sinn und Bedeutung 18*, 377-395. (査読あり)

4. Sawada, Osamu. 2013. The comparative morpheme in Modern Japanese: looking at the core from 'outside.' *Journal of East Asian Linguistics* 22(3): 217-260. (査読あり)
5. Sawada, Osamu. 2014. Comparison and goal-orientedness. *Proceedings of the International Modality Workshop via Grant-in-Aid for Scientific Research*, Vol. 5, 137-153. (査読なし)
6. Sawada, Osamu. 2013. The meaning and use of noteworthy comparison. *Proceedings of the International Modality Workshop via Grant-in-Aid for Scientific Research*, Vol.4, 103-139. (査読なし)
7. Sawada, Osamu. 2013. Precision and manners of measurement: the case of Japanese minimizers. In Kazuko Yatsushiro and Uli Sauerland (eds.), *Proceedings of Formal Approaches to Japanese Linguistics 6 (MIT Working Papers in Linguistics)*, 157-168. Cambridge, Mass.: MITWPL. (要旨査読あり)
8. Sawada, Osamu. 2013. The meaning and use of utterance situation-based comparison in Japanese. *Proceedings of the 15<sup>th</sup> Conference of the Pragmatics Society of Japan*, 221-228. (要旨査読あり)
9. Sawada, Osamu. 2012. The meaning of diminutive shift in Japanese: Its dimensionality, regularity and pragmatic effect. *Proceedings of the 14<sup>th</sup> Conference of the Pragmatics Society of Japan*, 257-260. (要旨査読あり)
10. 澤田治. 2012. 「比較構文の語用論」. 澤田治美(編), 『構文と意味: ひつじ意味論講座』, 第2巻, 133-155. 東京: ひつじ書房. (査読なし)
11. Sawada, Osamu. 2012. Expressivity and measurement: the case of the Japanese degree adverb *motto*. *Proceedings of the Modality Workshop via Grant-in-Aid for Scientific Research*, 127-152. (査読なし)
12. Sawada, Osamu and Jun Sawada. 2011. On the expressive use of *ano* 'that' in Japanese: a probability scale approach. *Proceedings of the 13<sup>th</sup> Conference of the Pragmatics Society of Japan*, 49-56. (要旨査読あり)
- [学会発表](計13件)
1. Sawada, Osamu. 2014. The concept of degree in discourse structure: the case of noteworthy comparison. The 88<sup>th</sup> Annual Meeting of the Linguistic Society of America. Minneapolis, U.S.A. Poster. January 3, 2014.
2. Sawada, Osamu. 2013. The conventionality of pragmatic inference in noteworthy comparison. The 16<sup>th</sup> Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan. Keio University, December 7, 2013.
3. Sawada, Osamu. 2013. Cross-linguistic variation of intensified comparison: the semantics/pragmatics interface. Workshop on Semantic Variation. University of Chicago, U.S.A. October 26, 2013.
4. Sawada, Osamu. 2013. On the context-dependent pragmatic strategies of Japanese diminutive shift. *Sinn und Bedeutung* 18. University of the Basque country, Spain. September 12, 2013. Poster.
5. Sawada, Osamu and Jun Sawada. 2013. The modal demonstratives in Japanese: a mismatch between at-issue and non-at-issue meanings. International Congress of Linguistics (ICL19), Semantics/Pragmatics Interfaces. University of Geneva, Switzerland. July 23, 2013. Poster.
6. Sawada, Osamu. 2012. The meaning and use of utterance situation-based comparison in Japanese. The 15<sup>th</sup> Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan. Osaka Gakuin University. December 2, 2012.
7. Sawada, Osamu. 2012. The utterance situation-based comparison in the Japanese

degree adverb *motto*. The 22<sup>nd</sup> Japanese/Korean Linguistics Conference. National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tokyo. October 12, 2012. Poster.

8. Sawada, Osamu. 2012. Precision and manners of measurement: the case of Japanese minimizers. Formal Approaches to Japanese Linguistics 6 (FAJL). Humboldt Universität/Japanese Embassy, Berlin, Germany. September 27, 2012. Poster.

9. 澤田淳, 澤田治. 2012. 日本語指示詞における意味の多次元性: 意味論と語用論のインターフェース. 第 37 回関西言語学会. 甲南女子大学. 2012 年 6 月 2 日.

10. Sawada, Osamu. 2011. The meaning of diminutive shift in Japanese: its dimensionality, regularity and pragmatic effect. The 14<sup>th</sup> Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan. Kyoto University of Foreign Studies. December 4, 2011. Poster.

11. Sawada, Osamu. 2011. The meanings of diminutive shifts in Japanese. The 42<sup>nd</sup> Meeting of the North East Linguistic Society. University of Toronto, Canada. November 11, 2011.

12. Sawada, Osamu. 2011. The meanings of modal affective demonstratives in Japanese. With Jun Sawada. The 21<sup>st</sup> Japanese/Korean Linguistics Conference. Seoul National University, South Korea. October 22, 2011.

13. Sawada, Osamu. 2011. Diminutive shifts in Japanese: a phonology-pragmatics interface. The Prosody-Discourse Interface IDP. The University of Salford, UK. September 12-14, 2011. Poster.

・「招待発表」(要旨査読なし)

1. Sawada, Osamu and Jun Sawada. 2014. Modal affective demonstratives in Japanese. Semantics Workshop in Tokai. Nagoya Gakuin University. March 21, 2014.

2. Sawada, Osamu. 2014. Comparison and

goal-orientedness. The Fifth International Modality Workshop via Grant-in-Aid for Scientific Research. Kansai Gaidai University. March 15, 2014.

3. Sawada, Osamu. 2013. The meaning and use of noteworthy comparison. The Fourth International Modality Workshop via Grant-in-Aid for Scientific Research. Kansai Gaidai University. August 28, 2013.

4. Sawada, Osamu. 2013. The context-dependency of Japanese diminutive shift. The Third International Modality Workshop via Grant-in-Aid for Scientific Research. Kansai Gaidai University. March 15, 2013.

5. Sawada, Osamu. 2012. An utterance situation-based comparison: the case of the Japanese comparative adverb *motto*. Nanzan University Linguistics Colloquium. Center for Linguistics. December 22, 2012.

6. Sawada, Osamu. 2012. Imprecision and speaker-orientedness in the interpretation of Japanese minimizers. The Second International Modality Workshop (via Grant-in-Aid for Scientific Research). Kansai Gaidai University. August 28, 2012.

7. Sawada, Osamu. 2012. Expressivity and measurement: the case of the Japanese degree adverb *motto*. The Modality Workshop (via Grant-in-Aid for Scientific Research). Kansai Gaidai University. March 17, 2012.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

澤田 治 (SAWADA OSAMU)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号 : 40598083